

## ま き ば

## 【巻頭言】

## 「同行される復活のキリスト」

牧師 竹井剛

イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた

(ルカによる福音書24章15節)

ルカによる福音書24章13節以下に記されている話はエマオ途上の物語です。イエス様の二人の弟子たちがエルサレムから西へ峠を越えたところにあるエマオ村に向かって歩いていました。今まで彼らはイエス様に出会い希望をもって従ってきましたが、そのイエス様が十字架にかけられて殺されてしまいました。ところが他の弟子たちがなんとそのイエス様が復活されたと言うのです。彼らは復活などあるはずがないと受け入れ信じることができず、エルサレムを離れ、自分たちの故郷であるエマオに帰る途中でした。これからどうしようか。失望と不安と疑いが、彼らの心の中に渦巻いていたでしょう。私たちもまた弟子たちと同じような心境に陥る時があります。何をやってももうまくいかないし、悪い時に悪いことが重なる場合もあります。弟子たちのこのような心情はそんな時の私たちの思いの象徴です。そうして弟子たちが歩いていると後ろから近づいてくる人がいました。それが復活のキリストでした。ルカによる福音書24章15節に「話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた」とあり、復活の主は失望の内に歩いている弟子たちと同行されます。

知人のキリスト者から伺った証が印象に残っています。彼がまだ洗礼を受ける以前のことで、彼は生きることへの葛藤を覚え、悩み、失意の中で、希望の光を求めて聖書を手に取って読んでいました。しかし聖書を読めば読むほど、疑問が出てくるし、益々イエス・キリストや信仰についてわからなくなってきたそうです。ところがある日、聖書を夜明けまで読み続け、ルカによる福

音書のエマオ途上の物語の箇所を読んでいると、ちょうど朝陽が差し込んできました。すると同時に15節の「イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた」という御言葉が目飛び込んできました。その時彼は「ああ、これだ」と思ったそうです。どんな時でもいかなる場合にも「自分と一緒に歩いてくれる人がいる。それが復活だ」。そう思うとなんだか肩の荷が軽くなりついに洗礼を受ける決心へと導かれたというのです。

自分と一緒に歩いてくれる人がいるということは、たとえそれが悲しみの道であれ、死の床であれ、人にとってこれほど大きな励ましはないのではないのでしょうか。この箇所は、二人の弟子たちがそうであったように、聖書を語り合う時、イエス様を思い起こす時、イエス様御自身が一緒に歩んでくださる主の愛を強く感じ入ることを伝えています。ですから、不安や恐れに心がとらわれ、希望が見えなくなる状況にあったとしても、どんな時にも復活のキリストが同行されるならば、聖書の神を信じる私共は恐れを感じることもあっても恐れに支配されることはないのです。

主イエス・キリストの2025年を迎え、この新しい一年も「同行者キリスト」を仰ぎ見て希望をもって共に歩んでまいりましょう。

昨年のクリスマス礼拝(12/22)にて澤邊桔梗(さわべききょう)姉妹が受洗され、主イエス・キリストの体なる教会の枝とされました。教会員一同大きな喜びをいただきました。以下は、姉妹が洗礼式の最後になされた「証」です。

澤邊 桔梗

クリスマスの日が近づくと、私は毎年、母が読み聞かせてくれたイエス様の本のことを思い出します。私の父と母はクリスチャンではありませんでしたが、聖書の教えを心から愛していましたので、姉の名前は山上の説教から、野の百合と書いて、「野百合」と名付けられたほどです。母はクリスマスのことをサンタさんがプレゼントしてくれる日とは教えず、イエス様という方が、御生まれになった日を静かに過ごし、感謝す

る日だと教えてくれました。この幼少期の思い出が、私が信仰を歩む最初のきっかけであり、信仰の種であったと思います。

私が初めて教会の門戸を叩いたのは高校1年生の時でした。私は保育園から大学まで、キリスト教関係の教育機関に通う機会はありませんでした。しかし、通学路の途中にあった教会の十字架と美しいステンドグラスになぜだか心惹かれ、カトリック田園調布教会の門戸を叩きました。とても温かく親切な教会でしたが、数か月で足が遠のいてしまいました。その次に教会に招かれたのが高校三年生の頃。実家の最寄り駅の側にあった日本キリスト教団新丸子教会の前で、たまたま玄関の掃除をされていた高橋博先生が声をかけてくださいました。高橋先生や奥様の美佐子さん、教会員の方には進路の話を聞いて頂いたり、悩んでいる時には寄り添って頂いたり、大変お世話になりましたが、大学へ入学してからは再び、教会から足が遠のいてしまいました。

高校生の頃から、農家のお嫁さんになることが夢だったので、大学4年生の時に農業婚活をして、夫翔平さんと出会い、ほぼ卒業と同時に結婚し、幕別町に参りました。そして、2022年の11月に、初めて帯広教会へ招かれました。その頃は運転免許も取りたてで、一人では心細いだろうと夫がいつも一緒に付き添ってくれました。教会へ行ったことも、聖書も読んだことがなかった夫が、ただ私のためだけに1年以上も共に礼拝を捧げてくれたことが、愛以外の何ものでもないことが、私はとても嬉しいのです。このことに心から感謝しています。

私が信仰に至るまでの経緯を思いだそうと振り返ると、今までの全ての出来事が、主が私を導くために用意なされた賜物に思えてきますが、ここでは二つ、話させて頂きます。

一つは、この帯広教会との出会いです。私が初めて伺った時、教会は無牧の状況にありましたが、優しく温かな教会の兄弟姉妹、森下一彦先生、北村一幸先生が心から歓迎してくださいました。当時、まだ、夫の実家や北海道の環境に馴染めなかった私にとって、帯広教会が一番落ち着ける場所でした。竹井剛先生と久美子さんがこの教会へ来てくださって、ますます帯広教会が大好きになりました。私でも信じられないことですが、竹井先生の説教を日曜日に拝聴し、その日から始まる一週間を、御言葉を噛みしめながら過ごしているうちに、ある日突然、主はいつも共にいてくださるということに確信を持つことができるようになったのです。その日から、例

えば自分のことを寂しい人だと感じなくなったり、変に人目のことばかりを気にしなくなりまりました。神様に愛されていると思えるようになりました。イエス様のことを主と呼び、祈ることができるようになりました。これら全てのことが、聖霊のはたらきによるものだと知ったのはつい最近で、神様は本当におられるのだと、涙が出るほど嬉しかったです。

二つ目は、夫の存在です。夫は出会った頃からとても優しく、愛情深い人でした。人に自然と優しくなれない私から見たら、夫の優しすぎる性格と行動は不思議で、神秘的でした。北海道に嫁いで2年目の冬、私の顔は突然、湿疹で真っ赤にただれてしまいました。外を出歩くことはおろか、家族にさえ顔を見られたくありませんでした。恥ずかしさのあまり、夫と目を合わせることも避けていました。しかし、そんな私のことを夫はますます労り、薬を塗って看病し、優しい言葉をかけ続けてくれました。私は夫から、無条件の愛、真実の愛を教えてもらいました。私が困難だと思う全ての出来事が、神の愛の御計画の中にあるのだと、改めて知らされました。私はこの出来事を経て、夫が私を愛してくれたように、また、父なる神様が私を愛してくださったように、信仰によって夫を真実に愛せるようになりたいと思いました。今では心を尽くして夫と夫の家族を愛することが、神様から与えられた使命だと思っています。

神様の愛に気付くことができ、私はとても幸運でした。愛する兄弟姉妹の皆様と、愛する竹井先生、愛する久美子さん、愛する夫に見守られ、受洗の時を迎えることに、これ以上ない喜びを感じています。これから信仰生活を送るにあたり、生涯初心を忘れず、先生や先輩方から信仰生活と祈りを教えて頂き、私が信仰を持つこと、教会へ行くことを温かく見守ってくださる夫と家族への感謝をいつも覚えていたいと思います。

長くなりましたが、今日、この時を迎えることができたのは、皆様のお祈りと、主の導きがあったからです。心から感謝申し上げます。皆様に、主の祝福が豊かにありますようにとお祈りします。





## 【教会員の声】

### 「中会修養会委員として信徒修養会報告」

長老 池田明美

対面は久しぶりなので「集まる」ことに重きを置き、真駒内コンパスで参加者の皆さまが宿泊する修養会を計画し、参加者を募りました。初めてのケースですが研修会委員会と合同で4回目の信徒修養会の計画を立てました。

講師は札幌北一条教会、函館相生教会で長く牧師をされておられた久野牧先生です。100名宿泊が貸し切りの条件でしたが、二日目休日ではないこと、また、高齢者にとって宿泊はハードルが高かったようで140名の参加者の内、宿泊希望は丁度半数70名でしたので当初の案は断念せざるを得ませんでした。日程はほぼ変更なく、第二案の札幌北一条教会を会場にすることで再度参加者を募り、少し増えて150名余りになりました。

9月23日(月・休)午後1時、開会礼拝から共にみ言葉に耳を傾け、神さまに賛美を献げました。いよいよ久野先生の登場、聖書全体を学んでいるかのような膨大な聖書の引用、講演に私の記憶の倉庫は瞬く間に限界を超えてしまいました。改めてレジメに目を通すと、捨てがたい文章が溢れています。特に忘れてはならない文を抜粋いたします。

「集められ」「交わり」「派遣される」。信仰者が共にいることによって、神さまが共にいてくださることを体験する。信仰者たちを一つに結びつけているキリスト者の信仰とはなにか、私たちは何を信じ、何を伝えようとしているのか確認が必要であると。

講師の久野牧先生は、記憶に残る構図を示してくださいました。今回のテーマ「信仰・希望・愛」は、イエス・キリストを中心に信仰・希望・愛がとり囲む構図に。

テサロニケ1章3節 「あなたがたが信仰によって働き、愛のために労苦し、また、わたしたちの主イエス・キリストに対する、希望を持って忍耐していることを、わたしたちは絶えず父である神の御前で心に留めているのです。」

「信仰・希望・愛」に生きることは心の持ちようの問題ではなく、体全体の働きを伴うもの。そのように生きることは、受動的ではなく能動的、消極的ではなく積極的、理論的ではなく実践的に働くことである。その中味は、「和解のための働き」である。

サブテーマの「和解の福音に生きるわたしたち」については、神と人の和解、他者(人、国、民族)との和解、自然との和解、自分自身との和解を、中心に私(人)を置く和解を構図に。「和解」は分かりやすく言えばキリストを通しての「仲直り」「回復された結びつき」である。

神は人をご自身の似姿に造られた(創世記1章26、27節)それは、人は本来互いに愛し合い、交わりの中で生きる存在ということを意味する。しかし現実の人間は、それとは遠くかけ離れて他者を自分をも敵としてしまった。互いを拒否し、排斥し、憎しみ合い、殺し合う関係にまで至っている。→神の創造の目的から離反。神はそのことに心を痛み、キリストにおいて人間の再創造の業をなされた。人はその神の愛に応えなければならない。

「小さく」なりつつある私たちの教会、また個人は和解の務めをいかに担っていくか。「小さい」ことの価値を示す聖書的な根拠として、「小さな群れよ、恐れるな」(ルカによる福音書12章32節)キリスト者は一人ひとりが「信仰、希望、愛」をもって、造られた世界の命のために、キリストの愛の証しのために生きるのである。教会が建てられた地域の「血の塩」「世の光」(マタイによる福音書5章13-16節)塩も光もそれ自体のために存在するのではなく、他に働きかけてそれを意味あるものとする。

講演のほんの一部だけの抜粋です。講演後、農管弦楽団のコンサート、会堂にアメイジンググレイスの透き通った声が、ヴァイオリンの音色が響き渡りました。青年部が作成してくれた工夫された各教会・伝道所の紹介がパワーポイントでなされ、安らぎのひと時を持ってました。帯広教会からは竹井先生の就職式、洗礼式、お茶会などが紹介されました。

午後6時頃から100名近くが7つの分科会に分かれて夕食を摂り、8時20分終了時まで協議の時を持つことができました。私は写真で記録を撮らせていただく係として、各部屋を少しの時間ですがお邪魔することができましたが、どの分科会も穏やかで和やかな雰囲気を感じとらせていただきました。

24日(火)9時、二日目は85名の参加者があり朝の祈り会を持ち、その後分科会の報告に耳を傾けました。講師から伝道が難しくても諦めないでもう一度やってみようとの励ましの言葉がありました。そして閉会礼拝、神さまのご臨在の内に11時30分、全ての日程を終了しました。

神さまが私たち一人ひとりをこよなく愛し、

私たち罪人の和解のためにイエス様をこの世に遣わしてくださいました。私たちは罪を赦された罪人なのですが、つい自分の罪を忘れて他人を裁いてしまいます。信仰を共にする兄弟姉妹が共に会堂に座っていることの恵み、喜びを、教会に集ったことのない方々にも分かち合えるよ

う日々祈り続けたいものです。

札幌での信徒修養会、道東での修養会、年を重ねると参加することが難しくなります。この度は帯広教会から6名もが集うことができ、神さまの恵みに感謝しています。

## コラム：召天者記念礼拝とクリスマス祝会

11月3日召天者記念礼拝が開催されました。帯広教会に深く関り、信仰の友であった召天者の方々を偲び、永遠に主のもとでの魂の光明をお祈りしました。奏楽は札幌北一条教会オルガニストの小泉優香姉です。優香姉には毎年、召天者記念礼拝の奏楽を担っていただき、私たちの心の癒しとなっています。今回は優香姉の御計らいで、礼拝後に「こども讃美歌」のオルガン演奏の機会がありました（こども讃美歌を懐かしく思い、小声で歌う方も）。会員の皆さんは、拝聴しながら幼い頃を懐かしく思い出したことでしょうか。音楽を聴くことで、脳裏に刻まれた曲が、当時のことを思い出す切っ掛けとなります。私も札幌で奉仕していた子ども礼拝のことを思い出しました。懐かしき嬉しい時間。

12月22日のクリスマス祝会は、受洗された澤邊桔梗姉のお祝いも兼ねた会でした。帯広教会にはエンターテイナーの会員がたくさんいます。フルート演奏（プロ級の鴫田兄）、チェロ演奏、詩の朗読、腹話術（写真：笑顔が最高の竹井先生）を觀賞して、とても楽しい時間でした。感謝いたします。  
(畠山尚史)



発行元：日本キリスト教会帯広教会  
発行日：2025年1月26日  
発行：「まきば」編集委員  
発行責任者：竹井 剛